

『南山神学』45号(2022年3月) pp.171-177.

【研究ノート】

田上雅徳の論考が示唆するもの

—政治哲学が神学に投げかける問い—

寒野 康太

岩波講座 政治哲学1の「主権と自由」に載せられている諸論考は、キリスト教神学に重要な問いを投げかけている。このことを、同書内の田上雅徳の論考「ルターとカルヴァン—近代初期における身体性の政治神学」¹によって探っていくこととしたい。

同論考は副題にもあるように、政治神学の動向と深く関わっている。政治神学は近年多く論じられる様になったことは、政治哲学に大きな影響を与えるものである。田上雅徳教授は、ウィリアム・キャバノーの「政治神学の想像力」²を訳出し、解説するなど、この関わりを推進するのに大きく寄与している。本論はこのような神学と哲学の学際的対話の一つの成果を示すものである。本研究ノートでは、ルターとカルヴァンの神学的所見と二人を引き継ぐ後世の神学見解が、政治的実体をふくむ近代社会のありように大きな影響を与えたという田上の了解に注目することとしたい。その了解は、政治哲学と神学の相互関係を前提としている。それをふまえて、本ノートにおいて、神学的議論によって、田上の論考にこれから考究すべきいくつかの問題が明らかにならないかということ論じることとしたい。

¹ 田上雅徳『ルターとカルヴァン—近代初期における身体性の政治神学』、小野紀明、川崎修 他編、岩波講座 政治哲学1—主権と自由、岩波書店、p.29-50。(以下、田上、岩波講座と略記)

² ウィリアム・キャバノー著、田上雅徳、東方敬信訳「政治神学の想像力—政治的実践としての典礼のために」新教出版社、2020。

田上は、当論考において、とくに聖餐論争という、今現在に至るまで、錯綜し様々な問題を派生せしめた論争に焦点をあてる。そして、この論争によってプロテスタント側に不一致が生じたとみる。しかし田上は、単に不一致を指摘するのではなく、ルターとカルヴァンが互いに神学的不一致を含みつつも、根底にある共通しているものを分析しようとしている。この共通点は、単に神学的所見をこえたある種のエートスとして捉えられるのである。その共通するエートスとは、身体性ということであり、近代の進展とともに変容していく。当論考において示されることは、この身体性が、ルターやカルヴァンの聖餐に関する根本理解から、どのように政治的なものへと関わるにいたるか、また、その共通見解がどのように変質し結果として近代社会の性格を方向付けるものとなったか、という点についての解明である。このように、聖餐理解を丁寧にたどると、西洋近代社会における身体性に関する議論がふかまり、近代政治思想理解に資するものであることが了解されるのである。

このように、錯綜した神学問題を、いったん見渡すことのできる形で捉え直し、それが、身体性という概念を通じて、近代の政治哲学と大きく関わっていることを示したということは、これからも大いに論じられる問題群を提供しているといつてよいのではないか。このことをより深く理解する為に、本論考では、3つの点を捉え、諸研究の深まりに資するいくつかの問題を提示することとしたい。それは、第一に聖餐理解と共同体理解との関連について、第二にカトリック性を軸とするルターとカルヴァン二人の教会理解について、そして、第三に近代における政治共同体の変遷にかかわる身体性の問題についてである。

聖餐理解の相違について、様々な議論があり、ここでは、その詳細に立ち入ることはできない。しかしながら、ここで、留意しておきたいことは、キリストの現臨を身体性においてうけとめるか、それとも精神主義的に受け止めるかということが一つの軸となって展開されているということである。このことで、ルターとカルヴァンが、それぞれ相違点を含みながらも、身体性というものを聖餐理解の土台に据えている様が捉えられているという点である。

ここで、聖餐理解において、身体性の基礎となっているものが如何なるもの

であるかが、考究されなくてはならないのではないだろうか。田上は、ルターの聖餐理解のキリストの偏在性を非身体的なものとみなしているようである。しかし、この偏在性は、ルターの救済論との関連で「私の為に、今現臨している pro me」ものとして聖餐が捉えられているからであり、その意味では決して田上の言うような「抽象的」な現臨ではなく、身体的現臨であると、ルター派神学者ヨアヒム・リングレーベン³は述べている。ルターの聖餐理解は、終末論的にロゴスなる神の新しい創造という業から了解される事柄であり具体的な事態なのである。この事態を解明しているリングレーベンは、ルターの sacrament 理解の根底は、sacrament が言語的性格を持っているということのみならず、同時に言葉が sacrament 的性格を有し、この sacrament と言葉は、「三・一」的相関関係にあることを指摘している⁴。このことは、ことばの「身体的」性格を浮き彫りにするのであり、また、このことは、ロゴスなるイエス・キリストが「人となられた」つまり、受肉という出来事に基礎をおいていることが、リングレーベンの論によって明らかにされている⁵。

ここにおいて、我々が、留意しなくてはならないことは、この点がカルヴァンとルターの重要な一致点であるということである。それは、「キリストが真の肉をまとった」ということが田上自身の引用にもある様に、カルヴァンにおいても聖餐理解の基礎をなしていると了解されるだろうが、そのことと、ルターの聖餐理解は、展開こそ違え、基礎を共有していることが明らかになるのである。このことは、重要な一致ではないだろうか。

そして、翻って見ると、身体性という聖餐理解は、受肉というイエスの出来事に根ざすこと、このことは、説明の方法こそちがっていても、ローマ・カトリックにおいても根本的な了解事項であることは疑いがない。この基礎における一致がどのような分裂にいたったかを理解することが、近代聖餐理解におい

³ ヨアヒム・リングレーベン(Ringleben, Joachim), 徳善義和訳, 「ルターの聖餐理解—ルターによる聖餐設定辞の意味」『ルター研究』10, p. 37-58, 45 頁。

⁴ *Ibid.*, p. 49.

⁵ *Ibid.*, p. 42.

で重要なことではないかと思われる。また、一致が覆い隠されてきたという事態は、近代の論争の性格によるのではないか。つまり、聖餐理解が、共通点をさぐるということにではなく、近代の一つの特徴である「公開の場における論争」という状況⁶のもと、相手に優位にたつことに力点が置かれたということが要因ではないだろうか。このことも神学と近代社会との関わりを考える際一つの分析の枠を提供しているのではないかと思われる。

また、この受肉の理解の一致にも関わらず分裂していく道の中に、第二の点である、可視的共同体の問題がある。田上は、いみじくも、聖餐共同体と教会の範疇が一致しないことを、ルターやカルヴァンの教会論を整理しつつ看取している。このことに注目しつつ、この可視性とカトリック性というものが関連していることを指摘したい。

田上は、聖餐理解がそのまま、可視的共同体の創立につながったように述べているが、そこには、カルヴァンにもルターにもあった一つの教会理解が見過ごされている様に思われる。それは、二人の改革者とも、真の「カトリック」、つまり公にしてすべての人に開かれた福音を生きる共同体をめざしていたということである⁷。その理想にローマ・カトリック教会は応えていないという痛切な認識が、たしかに二人にはあったわけだが、それだからといって、カトリック的なものを教会から取り除こうとしたのではなく、それぞれの神学的理解に基づいて、カトリック性を共同体が持つ方策を考慮していたということである。このことは、近代宗教共同体がキルへとゼクテ、あるいはデノミネーションという社会学的に分類される形式とはちがう、共同体論を内蔵している可能性が見過ごされている様に思われる。

⁶ 以下の論がとくに近代の論争の性格について詳しく論じている。Lilti, Antoine. "Querelles et controverses - Les formes du désaccord intellectuel à l'époque moderne", in *Dans Mil neuf cent - Revue d'histoire intellectuelle*, 2007/1 (n° 25), p.13-28.

⁷ この点については、ルターのカトリック性理解に関しては、Lienhard, Marc. *Luther - Ses sources, sa pensée, sa place dans l'histoire*, Genève, Labor et Fides, 2016, p.378. を参照のこと。カルヴァンの可視的教会の共同性ないし普遍性については、G プラスガー、カルヴァン神学入門、教文館、2017、165-166 頁を参照のこと。

最後に、身体性と政治的共同体との関わりであるが、まず、近代性格としての、「内面化」もしくは、精神主義と聖餐理解の相関関係が注目される中で、ウェストミンスター信仰告白が取り上げられる。カルヴィニズムの近代の変容の例として、当信仰告白の聖餐理解が、「飲食」という身体性をはなれて、精神主義的な側面からのみ記述されていると田上は論じているのである。そして、ここから、近代の宗教的性格として、内面の肥大化ということが理解されると論を進めている。

ここで、信仰告白についてのこうした理解は、カルヴァンから離れた精神主義なのではないのではないかとことを指摘したい。田上本人自身が説明しているように、カルヴァンの聖餐理解が、聖霊の働きを強調しているが、このことは必ずしも「非身体」的とは限らないのではないか。カルヴァンは、聖餐におけるキリストの現臨が、単に象徴的なものではなく、しかし、魔術的な sacrament の効力によってキリストの肉身が存在するというのでもないということを、聖霊における絆として説明しようとしたのであった⁸。このことは、田上の解説から明らかである。こうしたことをふまえると、ウェストミンスター信仰告白の「霊的に」というのは、この聖霊によっておきる sacramental な出来事を示しているのではないか。その場合、カルヴァンとウェストミンスター信仰告白には隔たりはない。

また、近代の進展に伴うルター派内部の聖餐理解についても精査されなくてはならないだろう。聖餐理解は、ルターの理解から「精神主義化」されたのだろうか。ルターこそまさしく身体性をもって飲食する、*manducatio oralis*⁹ ということを述べている。ルター派の神学史の中で、このような理解が後退し、

⁸ 田上、岩波講座、45頁。ここで、いわれている「霊的」とは、身体性を排除した精神としての霊という意味に解されるべきではなく、むしろ、田上自ら、同論の38-39頁においてのべているように、身体性をふくむ「全キリスト」にかかわるように働く聖霊と、それが人のうちに臨在する様を示しているのではないかとすることである。

⁹ この見解については、たとえば以下のものを参照のこと。Nelson Burnett, Amy, "The Mythe of the Swiss Lutherans – Martin Bucer and the Eucharistic Controversy in Bern", in *Faculty Publishings – Department of History* (University of Neblasca), 99. (2005), p.50.

精神主義化して、結果として教会共同体ではなく政治共同体に「身体性」の受け皿が移行するという自体がはたして起きたのかどうか、これから討究されていかななくてはならない問題であろう。

また、ここでは指摘するにとどまらざるを得ないが、身体性と当論文が所載されている講座の表題そのものが、おおきく神学と政治哲学とに関わっているのではないか。それは、主権と「身体性」との関連である。近代において、国王の主権が神から授与されているということを主張することで、個人の身体性が主権と一体化するという事態がおきている¹⁰。注目されるべきことは、主権の身体化が、王政に神学的なものを徹底的に組み込むことによって遂行されている点にある¹¹。ここでは、田上も指摘している、「人間の共同体的生を政治的な方向に一元化していこうとするとする流れに対して、緊張感を保ちつつこれと向き合う¹²」ということが、近代の深化のなかで、むしろ逆転し、神学が政治に奉仕して一元化を正当化するという事態が生じていたということではないだろうか。このことをどのように政治神学は評価し、説明するのか、これは、大きなテーマである。

以上の点が今後、近代初期の政治的主体と身体性という問題に、どのようにキリスト教神学が関わってきたのかを論じる際に討究されなくてはならない事柄であると思われる。このことは、しかし、田上の論考の価値を否定するという帰結にはならない。むしろ、田上が提起したこと、つまり、近代の政治思想と神学との関わりを論じたことは、これから一層重要な主題として研究されなくてはならないのではないかとことである。この論考によって、西洋近代の聖餐理解と西洋近代の共同体という一見結びつきが薄いような問題が実は身体性ということを経節点として深く関連していることがしめされたということであり、このことは様々な討究すべき視点を今後の研究にあたえることであろう。

¹⁰ ここでは、たとえば、フィルマーの思想や、ボシュエの思想を想起したい。

¹¹ フィルマーにしても、ボシュエにしても聖書解釈と王政理論は不可分のものである。

¹² 田上、岩波講座、42頁。

このことは、政治思想研究にとどまるものではなく、神学を研究するものにとっても重要な問いを投げかけている。つまり、神学的知見が、どのように近代の思考に影響を与えたか、それを神学の思考としてどのように見定め、了解し、現在の神学的知見と対話させていくか、ということが問いとして提出されたことを意味する。このことは、真に神学的思惟を要求する事態であって、無視することのできないものである。そして、政治哲学と神学の対話は緒についたにすぎない。今後一層の研究が望まれるということ、田上雅徳の論考は示唆しているのである。